

「生ける水」への希求

～詩篇 42 篇の瞑想から～

はじめに

鹿が谷川の流れを慕いあえぐ（「アーラグ」 עָרַג）ように、
神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。
私のたましい（「ネフェシュ」 נַפְשִׁי）は、神を、生ける神を求めて
渴いています（「ツァーメー」 צָמָא）。（詩篇 42 篇 1～2 節）

詩篇 42 篇は、「私のたましいはあなたを慕いあえぎます」という、切実な神への希求のことばから始まっています。この 42 篇の作者のたましいの叫びをきき、その渴きをいやす神の約束について考えてみたいと思います。

1. 詩篇 42 篇の「渴き」について

1～2 節は、同義的パラレリズムになっています。

鹿が	谷川の流れを	慕いあえぐように
神よ。私のたましいは	あなたを	慕いあえぎます。
私のたましいは、	神を、生ける神を	求めて渴いています

このように言い換えられているところから、この詩篇の「渴く」（「ツァーメー」 צָמָא）は「慕いあえぐ」（「アーラグ」 עָרַג）と同義であることがわかります。「生ける神を」求めて渴くという霊的な渴きです。

(1) 「渴く」（「ツァーメー」 צָמָא）と「慕いあえぐ」（「アーラグ」 עָרַג）

「ツァーメー」 צָמָא の初出箇所は出エジプト記で、この箇所では文字通りの、喉の渴きを意味しています。

民はその所で水に渴いた（「ツァーメー」 צָמָא）。それで民はモーセにつぶやいて言った。「いったい、なぜ私たちをエジプトから連れ上ったのですか。私や、子ども

もたちや、家畜を、渇き（「ツァーマー」 צָמָא）で死なせるためですか。」

（出エジプト記 17 章 3 節）

人間は、水なしでは生きることにはできません。喉の渇きは生命にも関わる大問題ですが、詩篇の作者は、生ける神を求めてこのような霊的な渇きを覚え、水（谷川の流れ）を慕いあえぐように神を慕いあえぎ求めているのです。

「アーラグ」 אֶרָג は、この詩篇 42 篇が初出です。旧約聖書中このほかには、ヨエル書 1 章 20 節で使われています。単に喉が渇いているというのではなく、あえぐほどの強烈なたましい（「ネフェシュ」 נֶפֶשׁ）の渇きです。その渇きは、水がないために衰え果てた砂漠に例えられる（詩篇 63 篇）ほど激しい切なるものであると言えます。

（2）「ネフェシュ」 נֶפֶשׁ

「ネフェシュ」とは、神によって創造された「生き物」「息のあるもの」を意味しています（創世記 1 章 20、21、24、30 節）。もともとは「喉」という意味であり、人間にとって生きる上で重要な部分であって、そこから人間存在全体である「たましい」をあらわしています。

生き物であれば、当然水なしには生きることにはできないものです。つまり、「ネフェシュ」は「渇く」ものであり、同時にその渇きを癒されることを願望として、欲求として常にもっているものと言えます。渇きが激しいものであると同時に、どうしてもいやされたい、満たされたいという抑えがたい願望があるのです。

水がなければ、渇いたままでは、干からびて衰え果てやがて死んでしまう・・・それが「ネフェシュ」 נֶפֶשׁ、「たましい」であり、その必要の満たされることを渴望する人間存在そのものであることを覚えます。たましいが必要としているものは、「水」なのです。

しかし、神はその「ネフェシュ」 נֶפֶשׁ なる人間を、はじめに「エデンの園」に置かれました。エデンの園は、本来、「水が豊かにあるところ」です。

一つの川が、この園を潤すため、エデン עֵדֶן から出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。（創世記 2 章 10 節）

2、渇きをいやす信仰

わがたましいよ。

なぜ、おまえはうなだれているのか。

私の前で思い乱れているのか。

神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。

御顔の救いを。 (詩篇4 2篇5節)

渇き、うなだれているたましいに、詩篇の作者は自ら「神を待ち望め」と語りかけます。この語りかけは、11節、そして43篇5節にも続いています。

詩篇4 2篇は、バビロン捕囚によってエルサレムを遠く離れて捕虜生活を余儀なくされたイスラエルの民によって書かれたものであろうとされています。神に渇き、うなだれながらも、神を「待ち望む」(「ヤーハル」**יָחַל**)、神の救いを求めるその心の動きには、作者のたましいを満たそうと働かれる神の聖霊さまの助けが感じられます。それが「なおも」(「オード」**עוֹד**)ということばです。現状を覆し、神のもとに救いを求め神の助けを「待ち望む」(「ヤーハル」**יָחַל**) ようにと導かれているのだと思います。

義に飢え渇く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。(マタイの福音書5章6節)

さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

(ヨハネの福音書7章37～38節)

しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

(ヨハネの福音書4章14節)

このように、「神を慕いあえぎ、渇いたたましいは満たされるとイエシュアは教えられています。ネフェシュ**נֶפֶשׁ**の渇きをいやす一縷の望みが、イエシュアのもとにあると。渇きのいやしを求めるものに与えられる「水」、それが「生けるいのちの水」であり、それはイエシュアを信じるものに与えられるとすでに約束されているのです。

3. 「生ける水」を与えられる者

詩篇42篇で希求されている渴きのいやしが、神への悔い改めによってもたらされる霊的な「水」によっていやされる約束について、イザヤ書からも見てみます。

ああ。渴いているものはみな、水を求めて出てこい。金のない者も。
さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、
穀物を買ひ、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。(55:1)

わたしは潤いのない地に水を注ぎ、かわいた地に豊かな流れを注ぎ、
わたしの霊をあなたのすえに、わたしの祝福をあなたの子孫に注ごう。(44:3)

悩んでいる者や貧しい者が水を求めても水はなく、その舌は渴きで干からびるが、
わたし、主は、彼らに答え、イスラエルの神は、彼らを見捨てない。(41:17)

その渴きのいやしは、「渴いているもの」「わたしのもとに来て飲」むもの、「わたしを信じるもの」、「わたしが与える水を飲む者」つまり、渴いていることを知っているのちの水がほしいと思う者にそれが与えられるとイエシュアは教えられました。それはイザヤの預言からも見ることができます。「渴き」は、実は神の恩寵であることに気づかされません。

「水が豊かにあるところ」であったエデン **עֵדֶן** に置かれていた人間は、最高の環境であったところから離れてしまいましたが、神は再びエデン **עֵדֶן** を回復し、人とともに住んでくださるための壮大なご計画のうちに、その「渴き」を与えてくださり、神を見い出させ、再び神を希求するように導いてくださったのです。

おわりに

御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。もはや、の

ろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中であって、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。

(黙示録 2 2 章 1 ～ 4 節)

神のご栄光と、この美しい光景を思い浮かべると、何とも言えない平安で包まれます。私たちが思う以上に、願う以上に私たちを満たすため、困難や渇きを与えてくださる主を思う時、切なく慕わしい思いがこみ上げてきます。

さらに渇きをいやす「いのちの水」について、これからも瞑想していきたいと願っています。

2017年10月2日 松原小百合